



第 58 号

(年 4 回発行)

編集発行

前学 院 大 学 会
報 委 員 会

印刷所
(有)小野印刷所

青森県の「食育」



学長 吉岡 利忠

「育とは、うむ、うまれる、そだてる、はぐくむ、やしなう、しつけ、などの意味を持ち、育がつく単語をあげるときりがない。育児育成教育・飼育・愛育・生育・発育など、例をあげて見よう。体育・体育とは健全なからだを作る教育として運動や競技の実技や知識を教える教科であり、知育

とは知識を豊かにし知能を高める教育であるという。

ところで、食育とはなんだろうか。最近、食育という単語や言語を目にし耳にする。本来、食育という単語はなかったような気がしている。ある文字に「育」を加えると何となく高尚で教育的でかっつけ入れやすい気がしないでもない。食育について自分なりに考えてみると、まずは基本的知識として食料、食料、食料、食品、栄養素、食生活、などについて述べよう。この中で食餌は食事と同様の意

味を持つが、餌(えさ)としての意味合いが強い。動物実験では高カロリー、高脂肪食や高糖質の餌(食餌)を自由に摂取させてさまざまな実験に供するといふ発表を聞く。この場合、食物の成分・量などを実験の目的を達成するように調整して用いることである。ヒトの病気を対象とする場合、病気を積極的に治療するために食餌療法というように使い、糖尿病のときには糖尿病食とか腎疾患のときの腎臓病食とかである。

食品学や栄養学の専門分野では、それぞれの単語の持つ意味を詳しく規定しているが、ここでは簡単に述べてみよう。食品

は単独の栄養素でできているわけではなく多くの栄養素の集合体である。食品によって構成される食事を摂取することによって生体は成長し成熟しかつ精神的にも成長していくわけである。私たちは、食品から栄養素を摂取しその中のエネルギーを用いて生命維持や身体活動を行っている。栄養素には糖質、脂質、タンパク質という直接エネルギー源になる三大栄養素と、ビタミン、ミネラルをそれに加えて五大栄養素がある。その他に水分や食物繊維は生体にとって必要な物質である。食事をする

ことは単に栄養素の取り込みということでは決してなく、それらを味わってこそ食事の楽しみがある。そのためには視覚、聴覚、嗅覚、さらには味覚が働き味覚としての甘い辛い塩辛い苦い旨味がその後押しをする。

ところで青森県は三方を海に囲まれ森林や山岳や河川として平野は他県とは比較にならないほど雄大な自然に恵まれた県。海の幸、山の幸、川の幸のさまざまな恩恵を受け、さらに米、野菜、花き、果樹、畜産など農林水産業が盛んである。このような環境、風土、歴史、気候を背景にし、さまざまな機会を通じて青森県の食育について県民に対し多くの取り組みが実施されている。

青森県の第二次食育推進計画によると、食育は、生きる基本であり知育、徳育、体育の基礎となるべきものであり、食についての意識を高め、自然の恩恵や食に関わる人々への感謝や

理解を深め、正しい情報に基づく判断力を養うとある。食育によって、食事マナーはもとより、好き嫌いはなく、一日に3度、栄養バランスの良い食事を取り、食事とともに適切な運動・休養・睡眠を取り、安全性や正しい知識を持ち、特に県産物の積極的な利用、四季折々の郷土料理の食文化を楽しむ、かつ農林業水産業の体験をするなど、いわゆる食育活動を積極的に行なうとするものである。とくに、小さいうちからの食育は健康で豊かな人間性をはぐくむ基礎となることから極めて大切であることはいまでもない。

初は、簡単な工事で修復可能の見込みでしたが、精査したところ思ったよりも損傷が激しく、基礎工事を含む大掛かりな対応が必要となることがわかりました。そのため、専門家の意見も聞きながら総合的に検討したところ、新しく建て替えた方が得策であるという結論にいたりました。その後、学生も交えた3号館建設検討委員会を立ち上げ、概要について協議を重ね意見を集約した結果、耐久性に優れた鉄骨構造の新3号館に生まれ変わるようになりました。昨年8月から現3号館の解体工事や3号館に面した1号館2号館の窓ガラスの補強工事等の準備作業を進め、12月から本工事に着手する運びとなりました。11月25日(火)には、理事長、学

新3号館の落成と工事の安全を祈願いたしました。新3号館は、平屋作りですが面積を2割ほど拡張しております。主として学生ラウンジとして使用されますが、プロジェクトやスクリーン、アクセスポイントなどを設置するので、パソコンを持ち込めばコードレスで動画の再生やプレゼン、インターネットの利用等が可能であり、ミニホールとしての機能も兼ね備えております。また、磁石も使える壁一面の大きな掲示板や機能性の高い椅子とテーブルを設置するなど、情報発信や交流の場としての機能についても一層の改良が図られております。また、車いすが使用できる広いトイレや緩やかなスロープ、プッシュ式蛇口や大型電気スイッチ、LED照明の採用など、障害者にも環境にも優しい設計となっております。3月25日の完成が待たれるところです。(文責：對馬)

新3号館の落成と工事の安全を祈願いたしました。新3号館は、平屋作りですが面積を2割ほど拡張しております。主として学生ラウンジとして使用されますが、プロジェクトやスクリーン、アクセスポイントなどを設置するので、パソコンを持ち込めばコードレスで動画の再生やプレゼン、インターネットの利用等が可能であり、ミニホールとしての機能も兼ね備えております。また、磁石も使える壁一面の大きな掲示板や機能性の高い椅子とテーブルを設置するなど、情報発信や交流の場としての機能についても一層の改良が図られております。また、車いすが使用できる広いトイレや緩やかなスロープ、プッシュ式蛇口や大型電気スイッチ、LED照明の採用など、障害者にも環境にも優しい設計となっております。3月25日の完成が待たれるところです。(文責：對馬)

本多庸一とキリスト教 (30)

学校法人弘前学院
理事長・学院長 阿保 邦弘



日本メソジスト教会監督
として東奔西走

初代監督本多庸一は、「日本メソジスト教会の兄弟姉妹に呈する書」と題する「第一監督公書」を護教に発表した。多年の懸案であったメソジスト三派合同の実現を感謝し、自分が初代監

督に選任されたことについては、大任を負うべき器量ではないが、教会の発展のために躊躇なく就任したと述べ、新教会の成立は若武者の初陣の門出のようなもので、安堵歓楽をむさぼるときではなく教会全般の発展に関わることであるからとにも努力奮闘しなければならぬと訴えた。東奥義塾卒業生でのちに青山学院教授となり、本多の弟子でもあった岡田哲蔵は、一九〇七(明治四〇)年六月即ち本多の監督就任直後から一九〇八(明治四十一)年一月に至る約半年間に、北海道から沖縄、韓国

にまでおよんだ前後十一回の伝道旅行の旅程を、汽車、電車一五、六五二キロ、船三、六三五キロ、人車・カゴ二五九キロ、徒歩四〇キロ、合計一九、五八六キロと計算しているが、これは青森・鹿児島間四往復半、優に地球半周に匹敵する距離に当たり、一か所内での移動奔走を加えればさらにこれを上回る東奔西走りであった。しかもその間、教会での説教、学校や公会堂での公演に加えて各種委員会、協議会その他の会合に出席し、面接応接の間には監督公書を草し、紀行感想を「護教」に寄稿し、教会政治は教団経営一般にわたる監督としての雑多な事務を執行したのであった。

メソジスト教会が、その条例において、監督は「地方に駐在することなく説教したまは教会の霊性上及び経営上の事務を監視せんため総会区域内を旅行すべきものとす」(日本メソジスト教会条例)と規定していたとはいえ、家庭をかえりみる暇もなく、幼い愛児の死すらいたむ余裕なく(日本メソジスト監督就任の八月十五日信州松本、浅間、軽井沢を巡って帰京すると七男の鐘七が三十九度以上の熱を出して病臥中であった。しかし、それを押しして関西九州方面の伝道に出発し、名古屋で愛児の悲報に接したのであった。)ひたすら奮闘し続けた本多の姿には、まさに「神に憑かれたる

人」そのものであった。本多のひたむきな伝道には、祖国日本に一日も早くキリスト教を定着させようとした使命感の燃焼をみることができるところである。一九一二年(明治四十五年)、その死に至るまでの五年間はこのような日々の連続であった。

一九〇八(明治四十一年)年合同となった日本メソジスト教会の第一回東西年会が開かれた。年会は東西それぞれ毎年一回開かれ、日本メソジスト教会の実質的な最高執行機関であった。神戸における西部年会では、初めての年会開催の意義と感動を語り、合同教会が必要とする実力として、人物の育成の重要性

を力説した。青山学院で開かれた東部年会では、ここでも人物の養成を説くとともに、メソジスト教会は草創の教会であってキリスト教を伝道するに当たっての原動力はキリストという人格を紹介することと罪の意識の啓発であると述べている。

教会として、また監督本多自身にとっても初めての年会のこととして、その組織編成や聖職者の任地決定、宣教師の資格取扱い等には困難が多かった。しかし、彼は一流の調和力を以てこれを調整しつつ筋を通し、合計九十五の教会、日本人伝道者百六十九人、外人宣教師四十人の両年会を指導し成立させたのであった。(以下次号)

新3号館について

1号館と2号館の間にあるプレハブ2階建ての3号館は、平成24年の豪雪による損傷と老朽化の進行により、安全性の確保が困難になったため、しばらくの間、一階廊下部分のみを連結通路として使用し、それ以外の部分は閉鎖しておりました。当

初は、簡単な工事で修復可能の見込みでしたが、精査したところ思ったよりも損傷が激しく、基礎工事を含む大掛かりな対応が必要となることがわかりました。そのため、専門家の意見も聞きながら総合的に検討したところ、新しく建て替えた方が得

策であるという結論にいたりました。その後、学生も交えた3号館建設検討委員会を立ち上げ、概要について協議を重ね意見を集約した結果、耐久性に優れた鉄骨構造の新3号館に生まれ変わるようになりました。昨年8月から現3号館の解体工事や3号館に面した1号館2号館の窓ガラスの補強工事等の準備作業を進め、12月から本工事に着手する運びとなりました。11月25日(火)には、理事長、学

新3号館の落成と工事の安全を祈願いたしました。新3号館は、平屋作りですが面積を2割ほど拡張しております。主として学生ラウンジとして使用されますが、プロジェクトやスクリーン、アクセスポイントなどを設置するので、パソコンを持ち込めばコードレスで動画の再生やプレゼン、インターネットの利用等が可能であり、ミニホールとしての機能も兼ね備えております。また、磁石も使える壁一面の大きな掲示板や機能性の高い椅子とテーブルを設置するなど、情報発信や交流の場としての機能についても一層の改良が図られております。また、車いすが使用できる広いトイレや緩やかなスロープ、プッシュ式蛇口や大型電気スイッチ、LED照明の採用など、障害者にも環境にも優しい設計となっております。3月25日の完成が待たれるところです。(文責：對馬)



2014年度 弘前学院大学学位記授与式

文学部	第41回
社会福祉学部	第13回
看護学部	第7回
大学院社会福祉学専攻科修士課程	第11回
大学院文学部研究科修士課程	第9回

◇日時：2015年3月20日(金) 午前10時
◇場所：弘前学院大学体育館

卒業礼拝

◇日時：2015年3月19日(木) 午前10時～
◇場所：礼拝堂

*礼拝終了後、体育館において学位記授与式のリハーサルを行う。

研究紹介 28

病気の子どもを支援する援助

小児のレジリエンス研究



看護学部 講師 齋藤美紀子

私は小児看護学を専門としており、おもに疾患を持つ子どもの心理的側面に焦点を当てた研究を行っています。現在、慢性疾患を持つ子どものレジリエンスの発達と支援に関する研究に取り組んでいます。

を持つことになりました。レジリエンスは統合的な概念であり、いくつかの要因から構成されています。一般的には、環境要因と個人内要因の2つの側面からとらえることができますが、近年、「I have」(私は持っている)「I am」(私は)である「I can」(私はできる)

る」という3つの枠組みが提唱されています。私はこのモデルを活用して、慢性疾患を持つ子どものレジリエンスモデルを明らかにしようとしています。これを通して、慢性疾患を持つ子どもに対するレジリエンスを高める介入方法を見出すのが現在の目標です。

2014年度

「リカレント教育を経験して



看護学部 教授 千葉 正司

今年度は、看護師からの希望の多い研修内容を選択し、かつ本学教員の専門性を生かすことを主眼とし、「リカレント教育の原点を見つめて」のテーマで開催しました。研修会は本学6号館を会場に、10月4日(土)と11月1日(土)、13時〜16時



15分まで行われました。

第1回の研修会では、高田まり子先生が「アンケート調査のノウハウ」を講演され、統計学

の活用を解説されました(写真1)。その後、情報処理室に移動し、渡部菜穂子先生が「アンケート調査における集計・分析の基礎演習」を、実際にパソコンを操作し、指導しました(東奥日報に写真掲載)。また、島

看護の力があなたの病院の機能評価を高めます。日本病院機能評価の概要とケア実践場面の医療安全について」を講演し、医療安全の重要性を力説されました(写真2)。

は、4演題すべてが大変有意義・有意義という回答が大多数を占め、好評を博しました。各施設看護師に対する看護研究の指導・助言は、国立病院機構弘前病院、同青森病院で行いました。そこでは、本学と看護実践現場との連携を意図し、本学教員が各施設に出向き、看護研究の向上に協力しました。



鋭意、努力して行こうと考えております。

講演会『命の尊さ』

医療・教育・福祉の立場から考えるを振り返って

2014年11月22日(土)に本学の地域総合文化研究所と公開講座委員会の共催で、講演会『命の尊さ』医療・教育・福祉の立場から考えるが開催された。この講演会は、学園都市ひろ

うか。「命の尊さ」という原点に立ち返って、医療・教育・福祉の異なるフィールドから話題を提供するコラボレーション的な講演会を目指した。

と人間性を持つて一杯に生きていることを、彼らの描く絵や詩を通して知ることができ

です。もちろん、その中には見る価値十分の傑作もあります。しかし、日本人にとつてどちらかといえばなじみのない国つまり、経済小国の監督たちが、土地に根付いた市井の人々を通して人生を深く洞察した作品を多く生み出している気がします。

最初に、基調講演として、本学学長の吉岡利忠先生から「脱短命県」というタイトルでお話

障壁の圧力が強すぎて、二次的な障害に陥らせてしまうことがある。そうしたことを避け、障害のある人々の社会参加を促進するために、障害のある人々の言動をリフレミングし、セ

談話室

映画と異文化理解



文学部 准教授 鎌田 学

今年度私が担当している科目の一つである「異文化理解A」は、別名(映画による)異文化理解です。映画作品を手がかりにして、描かれた国の状況、国民のエートス(国民性)などについて参加者と議論します。毎週一人一作品をプレゼンしている

文科の専門科目ゆえ英語圏のものに限定していることもあって、学生が選ぶ作品はすべてハリウッド映画。英語圏ならば他にも、イギリスもアイルランドもあってもよさそうなものですが、やはりアメリカ産が日本に輸入される量で、そして宣伝のうまさで圧倒しているからそうなるのでしょう。

を待まさん、遅まきながらそのことに気付いた私は授業後半になって、映画ならどこの国のものでもOKとしました。その具体例を示すために、フィンランドのカウリスマキの「ル・アールの靴

手になる「野いちご」(1957年)を先に見ました。そこに描かれていたのは或る老医師の現在と記憶と妄想ですが、その「老い」の真理・真相は異国の私たち日本人にもはっきりと伝わります。

現代社会では、核家族化、少子高齢化、人間関係の希薄化、孤独死の増加など、取り巻く環境が厳しくなっている。私たちの「命」に触れる機会が少なくなってきたと言われている。しかし、ほんとうにそうなのだろうか。

次にリレートークの第一報告者として本学社会福祉学部専任講師の立花茂樹先生にお話を聞いた。テーマは、「特別支援教育から見えてくること」。障害があっても、素晴らしい感性

リレートークの第二報告者は本学社会福祉学部准教授の高橋和幸先生で、「中学生が高齢者世帯の除雪ボランティアを経験することで得られる多面的効果」というタイトルで話された。

2時間半という時間があつという間に過ぎ、実に有意義で楽しい時間だったという好意的な声をたくさん頂戴した。またこのような企画に取り組んでみたい。(文責 川浪亜弥子)

るので、半期の授業で十数本の映画を知ることになります。英

とはいえ、冷静に考えれば、英語圏の映画に限定することはそもそも「グローバルな時代」における異文化理解の授業としては、はなはだ偏ったものと言わざる

現在日本で興行的にヒットする外国映画の多くがアメリカ産

は、4演題すべてが大変有意義・有意義という回答が大多数を占め、好評を博しました。

手作りのために中学生の雪かき塾が行われていることの紹介で始められた。訪問先の高齢者からお礼を言われて嬉しかった等の達成感が得られたり、一人暮らし高齢者の生活の大変さを実感したり、訪問先まで市社協の車に乗せてもらったり指導者から教えてもらったことへの感謝の気持ちの形成、豪雪地帯で生きていくために地域の人々が助け合わなければならないという学びを中学生は得ることができたのだという話題提供をしてくださった。

講演後、聴衆の方々からは、2時間半という時間があつという間に過ぎ、実に有意義で楽しい時間だったという好意的な声をたくさん頂戴した。またこのような企画に取り組んでみたい。

雪ボランティアと住民交流をセットにした実践、次代の担い



命の尊さ 医療・教育・福祉の立場から考える

第7回卒業研究発表会を終えて

看護学科 四年 三浦 信也



看護学部において、第7回卒業研究発表会が平成26年12月6日(土)に行われました。

私たち看護学部4年次生は、4月から担当教員とともに、病院実習、就職活動、国家試験対策の勉強などと並行しながら、卒業研究を進めてきました。

私は、「臨床実習における看護学生のインシデントの原因」というテーマで卒業研究を進めてきました。インシデントとは、医療事故になったかもしれない出来事のことです。看護学生が臨床実習において、どのような原因でインシデントを経験しているのかを明らかにしたいと思い、このテーマにしました。研究を行う上で、まず、研究背景や目的を明確化し、どのような研究方法がよいか検討しました。私は本学の学生のイ

ンシデントの実態を明確にしたいと思い、アンケート調査を行い、集計した結果を考察しました。それぞれの項目を考察していくと、内容がまとまらず、研究が行き詰ることもありましたが、しかし、そのときには、研究計画書から自身の研究の目的を振り返り、明らかにしたいことを確認したり、担当教員やゼミのメンバーから客観的な意見をもらったりすることで、考察を深めることができました。

卒業研究発表会は一年近く研究してきた成果を7分で発表するため、私たちは、何度も原稿やスライドを修正し、発表の練習を重ねてきました。発表会の際には、会場に緊張感が漂っており、どの学生も緊張した面持ちでした。発表をしていない学生も、司会やタイムキーパーなどのそれぞれの役割を務めたり、他の学生の発表を真剣に聞いて、積極的に質問や意見を申し合っていました。特に大きなア

クシデントもなく、全員無事に発表を終えることができました。今回の卒業研究を通して、研究のプロセスや、あらゆる視点から物事を考えることを学ぶことができました。今後は、看護師国家試験合格に向けて、頑張っていきたいと思えます。

私は夏休み期間中に、弘前市内にある地区公民館・図書館で社会教育実習を行った。二年生の時からこの分野の勉強を始め、実際に社会教育を行っている場の方々の声を直接聞かせていただいた。私がお話を聞かせていただいた公民館は、船沢公民館、裾野公民館の二つで、それぞれ、住民の方々は純農家がほとんどで、少子高齢化も進

んでいる地域の公民館である。若い世代が地元を離れてしまう「離村現象」が続いており、事業に参加する住民の平均年齢も高い。更に、今はテレビや携帯電話などのメディア媒体が整っており、知りたいことがすぐに調べられる。昔のように人から人へ直接物事を教えるということが少なくなってきたというところもおっしゃっていた。私は、社会教育では、人と人の繋がりがよって得られる知識・経験がとても重要だと思っていたため、このような状況をどうにかして打破していかなければいけないと感じた。ただ、両公民館も、若い世代とお年寄りの交流

をメインにした行事を毎年行っている。毎年楽しみにしてくれている住民も多いので、更に工夫して継続していきたいと両公民館の館長さんはおっしゃっていた。今回の社会教育実習で、現在の公民館のおかれている状況、課題が見えてきた。職員の方は地域の人達を思いやり、工夫を凝らした活動をしている。そのことをもっと地域の人達に知ってもらうことで、活性化していく事業も増えていくのではないだろうか。今回、社会教育に対する自分の考えを更に深めることができた。貴重な経験をできたことを嬉しく思う。

弘前の文学地

日本語・日本文学科 二年 蜂谷 菜摘



十一月二十三日、清々しい晴天の中、文学散歩が行われた。私は、今年初めて参加することになった。弘前公園を中心に、弘前市にゆかりのある文学人達の石碑と歴史のある建造物を見て歩いた。

文学館見学の後は、二班に分かれての見学。ガイドさんの丁寧な解説を聴きながら、文学地を散歩した。朝陽小学校には、同校卒業生の佐藤紅緑と石坂洋次郎の文学碑があり、二人の一句が刻まれている。朝陽小学校の周辺には門を構えた家が多く、上流階級武士の住む区域であり歴史の感じられる街並みであった。

その次の一戸三三の文学碑は、藤田記念庭園前にある。一戸の津軽方言詩集「ねぶた」の一節が刻まれている。ガイドさんの話によると庭園には来ても、一戸の文学碑を見物する人は少ないという。私もその一人で、初めてしっかりと見学した。津軽弁の詩に新鮮な印象を受け、一戸の弘前への親しみが感じられた。

弘前公園の中へ入って行くこと、三の丸に福士幸次郎の文学碑がある。詩集「展望」の「鶴」の一節が刻まれている。詩集のタイトルでもある鶴とは白鳥のことで、弘前公園内に一羽のみ住んでいる白鳥が、この文学碑そばの水辺でよく見られるらしい。この日白鳥は別の場所にいるが、詩と現実の風景が奇跡的に重なる、とても趣深い景色がそこにはあった。弘前城天守は、改修工事が本格的に始まる。池から水が抜かれるため、水面に映る姿を見られるのはこの日が最後であった。私はしっかりとその景色を目に焼き付けた。

弘前公園を出た後は、弘前教

習を重ねてきました。発表会の際には、会場に緊張感が漂っており、どの学生も緊張した面持ちでした。発表をしていない学生も、司会やタイムキーパーなどのそれぞれの役割を務めたり、他の学生の発表を真剣に聞いて、積極的に質問や意見を申し合っていました。特に大きなア

クシデントもなく、全員無事に発表を終えることができました。今回の卒業研究を通して、研究のプロセスや、あらゆる視点から物事を考えることを学ぶことができました。今後は、看護師国家試験合格に向けて、頑張っていきたいと思えます。

私は夏休み期間中に、弘前市内にある地区公民館・図書館で社会教育実習を行った。二年生の時からこの分野の勉強を始め、実際に社会教育を行っている場の方々の声を直接聞かせていただいた。私がお話を聞かせていただいた公民館は、船沢公民館、裾野公民館の二つで、それぞれ、住民の方々は純農家がほとんどで、少子高齢化も進

博物館実習を終えて

日本語・日本文学科 四年 後藤真妙子



今年度の博物館実習、私は青森県立郷土館に行かせていただきました。実習で実感したこと

は、学芸員に求められる資質の多様さと、何よりも「学芸員」の仕事への情熱を持つことでした。すっかり言い尽くされている感のある「雑芸員」という言葉があります。「学芸員は、何でもやらなければならない」とい

うマイナスの意味で使われることが多いです。しかし、私はそうは思いません。博物館の使命は人類の遺産を集積し、次世代に残していくことです。その実現のためには、あらゆる困難に対応する力がなければなりません。2011年3月に発生した東日本大震災では、被災した博物館の資料も多くが泥をかぶってしまいました。傷んでしまった資料、文化財の修復は今も続けられています。このような未曾有の困難にも立ち向かおうとする力は、博物館で働く個人と

しての学芸員にも、きつと求められる。詳細に再現されていた。改めて弘前は、文学と伝統の歴史に囲まれた素晴らしい町だと思ふ。充実した一日を過ごせてよかった。他の文学地もぜひ訪れてみたい。

また、実習で一番印象に残ったのは、職員の方々の働いている姿でした。もともと博物館を良くしようという気持ちや、資料を大切に扱い、様々な角度から興味を持つことから、職員の方の、仕事に対する情熱を感じました。

より有意義な実習にしよう、少しでも自分の欠点を直して臨もうと思っていました。逆に自分に足りないところが沢山見えてきた実習でした。しかし、学芸員として大切なことだけでなく、社会人として大切なことも沢山学ばせていただきました。とても充実した実習でした。今後は学んだことを忘れず、何事にも情熱を持って、成長し続けて行きたいと思えます。

社会教育実習を終えて

英語・英米文学科 三年 江畑まどか



私は夏休み期間中に、弘前市内にある地区公民館・図書館で社会教育実習を行った。二年生の時からこの分野の勉強を始め、実際に社会教育を行っている場の方々の声を直接聞かせていただいた。私がお話を聞かせていただいた公民館は、船沢公民館、裾野公民館の二つで、それぞれ、住民の方々は純農家がほとんどで、少子高齢化も進

んでいる地域の公民館である。若い世代が地元を離れてしまう「離村現象」が続いており、事業に参加する住民の平均年齢も高い。更に、今はテレビや携帯電話などのメディア媒体が整っており、知りたいことがすぐに調べられる。昔のように人から人へ直接物事を教えるということが少なくなってきたというところもおっしゃっていた。私は、社会教育では、人と人の繋がりがよって得られる知識・経験がとても重要だと思っていたため、このような状況をどうにかして打破していかなければいけないと感じた。ただ、両公民館も、若い世代とお年寄りの交流

をメインにした行事を毎年行っている。毎年楽しみにしてくれている住民も多いので、更に工夫して継続していきたいと両公民館の館長さんはおっしゃっていた。今回の社会教育実習で、現在の公民館のおかれている状況、課題が見えてきた。職員の方は地域の人達を思いやり、工夫を凝らした活動をしている。そのことをもっと地域の人達に知ってもらうことで、活性化していく事業も増えていくのではないだろうか。今回、社会教育に対する自分の考えを更に深めることができた。貴重な経験をできたことを嬉しく思う。

今年度の博物館実習、私は青森県立郷土館に行かせていただきました。実習で実感したことは、学芸員に求められる資質の多様さと、何よりも「学芸員」の仕事への情熱を持つことでした。すっかり言い尽くされている感のある「雑芸員」という言葉があります。「学芸員は、何でもやらなければならない」とい

2014年度クリスマス礼拝と音楽の夕べ開催

2014年12月11日、本学礼拝堂において、クリスマス礼拝が行われました。厳肅な雰囲気の中、多くの教職員・学生が集い、パイオルガンや清らかなハンドベルの音に包まれながら、キャンドルを灯し、東奥義塾高等学校主事の阿部義也牧師による「絶望を希望に変える出来事」と題してメッセージをいただき、イエス・キリストのご降誕を賛美し、共に祝うことができました。

また、同日夜6時30分より、第15回目の「クリスマス音楽の夕べ」が開催されました。

ハンドベルの軽快な音で音楽会が始まり、楊尚真宗教主任による聖書朗読と祈禱がありました。続いて本学のパイオルガン奏者竹古真希先生の演奏があり、続いて本学客員教授の笹森建英先生のピアノ伴奏で、



今年度の博物館実習、私は青森県立郷土館に行かせていただきました。実習で実感したことは、学芸員に求められる資質の多様さと、何よりも「学芸員」の仕事への情熱を持つことでした。すっかり言い尽くされている感のある「雑芸員」という言葉があります。「学芸員は、何でもやらなければならない」とい

しての学芸員にも、きつと求められる。詳細に再現されていた。改めて弘前は、文学と伝統の歴史に囲まれた素晴らしい町だと思ふ。充実した一日を過ごせてよかった。他の文学地もぜひ訪れてみたい。

また、実習で一番印象に残ったのは、職員の方々の働いている姿でした。もともと博物館を良くしようという気持ちや、資料を大切に扱い、様々な角度から興味を持つことから、職員の方の、仕事に対する情熱を感じました。

より有意義な実習にしよう、少しでも自分の欠点を直して臨もうと思っていました。逆に自分に足りないところが沢山見えてきた実習でした。しかし、学芸員として大切なことだけでなく、社会人として大切なことも沢山学ばせていただきました。とても充実した実習でした。今後は学んだことを忘れず、何事にも情熱を持って、成長し続けて行きたいと思えます。



今年度の博物館実習、私は青森県立郷土館に行かせていただきました。実習で実感したことは、学芸員に求められる資質の多様さと、何よりも「学芸員」の仕事への情熱を持つことでした。すっかり言い尽くされている感のある「雑芸員」という言葉があります。「学芸員は、何でもやらなければならない」とい

『ロミオとジュリエット』公演を終わって

社会福祉学部 教授 石田 和男

本プロジェクトは、昨年5月の新任教員歓迎パーティーの会場であつた隣の隣に座られた吉岡利忠学長のご提案から始まりました。クリスマスの頃の公演がよいのではということになりました。

早速、台本は川浪亜弥子先生にお預かりしました。先生はそれからひと月あまりで台本の原稿を仕上げられました。明快で簡潔な筋運び、それに現代人が納得できるような合理性も具わっていました。私の勝手な注文である、原作にない飢餓とチャリティーの話も盛り込んでいただきました。

その間に「めん房たけや」さんのご主人と知り合い、お芝居の公演を手伝っていただくようお願いしました。たけやさんはこれまでジャズ公演をたくさん手掛けてこられたということので、本公演に欠かすことのできない人と思いました。

主な役者は本学の学生が担当し、その他の配役は稔町のひとにお預りすることになりました。音響、照明に関しては市内の公演とたくさん手掛けている盛さんにお預りしました。これで安定感が増すと思われました。

また音楽劇と銘打っている以上、弘前のアーティストたちとのコラボが要るのですがこれもまた芝居の稽古は十月半ばから始まり、2か月間に及びました。最初はセリフを覚えるところから始め、ひと月後に演技の稽古に入りました。アクションシーンの振り付けは、東京の演



た。ロミオ役のいしだ吉成さんとジュリエット役の下山宝楽さんの呼吸もピッタリ合い、スピリチュアルな世界をうまく表現していました。本番近くまで各パートごとに稽古をしてきました。それが合

アブラハム役

社会福祉学部 一年 盛 生弥

私は演劇を見たこともやったことも無かった。

今回の『ロミオとジュリエット』の演劇は音楽に合わせて役を演じた。

私は物語の冒頭で、敵対する家の者達と抗争する役だった。

台詞は少なかつたが、槍で戦うシーンもあり、演技をする場面は多かつた。

今回の演劇は素人の学生がほ

仲間達と切磋琢磨して練習を

重ね、ついに迎えた本番は見事成功した。

この演劇は練習を合わせても数日しかない。

しかしこの数日が将来の私を助けるだろう。

この演劇に協賛してくださった方々、そして参加したすべての人々に感謝している。

この経験は大学生活の思い出ではない。

私の人生の大いなる糧である。

ローレンス神父役

社会福祉学部 一年 相馬 智明

私は今回のロミオとジュリエットはすごく貴重な体験でした。

ローレンス神父という役という物語の力ぎを握る貴重な役をやれてよかつたと思つています。

みんな演劇初心者ということもあつてか最初だからだと練習がつづいており不安だらけで私自身も演出家の森井陸さんや主

役のいしだ吉成さんが来てくださった前まではうまく演技が出来ななままでした。

しかし森井陸さんが指導に来てくださったから全員が見違えるようになったので本番でも大きなミスもなく終わらせることができたのでよかつたです。

しかし私自身汗が止まらなく

思ひます。

やつていくという事は、とても素晴らしい事だと思ひました。

このように貴重な経験をさせて貰つた事を感謝し、これから的人生や勉学に対して励んで行きたいと思つています。

ベンブオーリオ役

社会福祉学部 一年 鳴海 遼

弘学で演劇、それは異例のことだつた。

照明や音楽、演出監督はプロ、地域の方々も参加、そして主演

管理や気の引き締めなどあらゆる場面でも注意しなければなら

ないのだと思つた。

本番当日、私はとても緊張し

顔が真っ赤になつてしまつたが

マチネ・ソワレともに終わつた

後には「良かつた」という思い

でいっぱいだつた。

いしだ吉成さんや森井陸先生

をはじめ多くの仲間と演じる事ができてとても楽しかつた。

私はこれからも魅力のあるものに触れて、周りの人々にも希望を持てるように日々努めていきたい。

ベンブオーリオ役

社会福祉学部 一年 鳴海 遼

をかの有名ないしだ吉成さんが務めるといふ本格的で沢尻なプロジェクトだつた。

しかし、役者として参加する学生は皆素人。

当初はその現実離れした話に、自分たちが参加するといふ

実感がなかつた。

その意識が変化したのは残りの1ヶ月の時だつた。

実際にプロの方々と同じ場所、同じ時間を共有して稽古を重ねていくうちに、それが実感となり、確かな手応えを感じるようになった。

当日は雨天にもかかわらず、

昼と夜どちらも席が足りないくらい

の客足だつた。

そしていよいよ開幕。

『ロミオとジュリエット』は、

ティボルト役

社会福祉学部 一年 折井 史仁

最初に、この話を石田和男教授から聞いた時は「本当にやるの

のだからか」とか「東京から芸能人が来て芝居をやるなんて信じられない」と半信半疑でした。

しかし実際に稽古などをやつていくうちに「本当にやるんだ」と実感が湧いてきました。

最初はセリフを言うのが恥ずかしかつたり、「失敗したらどうしよう」などという不安がありました

りましたが、練習をしていくうちに徐々に恥ずかしさも消えていき、お芝居をしているのが楽しいと思つようになりました。

ティボルト役

社会福祉学部 一年 折井 史仁

長い人生の中で、このような経験が出来るのは中々無い事であり、一つの事を皆で協力して

やつていくという事は、とても素晴らしい事だと思ひました。

このように貴重な経験をさせて貰つた事を感謝し、これから的人生や勉学に対して励んで行きたいと思つています。



昨年の12月20日、私は初めての舞台「ロミオとジュリエット」に参加した。

本番までの日々を振り返ると、朗読から始まり実際の演技指導まであつたという間の日々であつて「長いようで短かつた」と感じた。

